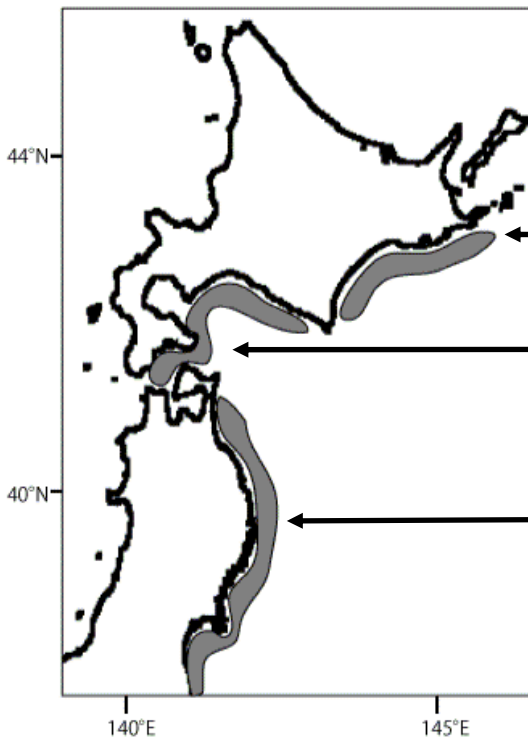


平成23年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成23年7月～9月)のポイント

常磐～道東太平洋の北部太平洋海域におけるスルメイカの
来遊水準は全体としては前年を上回る。



道東太平洋海域：
来遊量は前年を上回る。
魚体は前年より大きい。

津軽海峡～道南太平洋海域：
来遊量は前年並み。
魚体は前年並み。

常磐～三陸海域：
来遊量は前年を上回る。
魚体は前年より大きい。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 新村、内海

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所 業務推進部

担当：野上、谷津

電話：011-822-2131、ファックス：011-822-3342

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://hnf.fra.affrc.go.jp/>

平成 23 年度 第 1 回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2011年7月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域。

対象漁業：いか釣り、底曳網、定置網、まき網。

対象魚群：冬季発生系群（2011年級群）。

1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底曳網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて形成。
- (3) 魚体：前年より大きい。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年並み。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて形成。
- (3) 魚体：前年並み。

3. 道東太平洋海域（いか釣り、底曳網）

- (1) 来遊量：前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：漁場形成は前年より早い。
- (3) 魚体：前年より大きい。

漁況の経過（2011年5月～6月）および今後の見通しについての説明

(1) 資源状態

太平洋海域で漁獲されるスルメイカは、冬季発生系群が主体であり、これに秋季発生系群の一部が含まれると考えられている。太平洋海域における資源水準を漁獲量の動向から推測すると、1970年～1980年代は低位水準で推移した。1989年から増加に転じ、それ以降では1996年（年間漁獲量：276千トン）が最も資源水準の高い年となった（図1）。近年は高位から中位水準で推移しており、直近3年の漁獲量は横ばいで、107千～117千トンの範囲であった。主漁場は常磐以北太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域および道東太平洋海域に区別される。2010年7月～9月の常磐以北太平洋海域での漁獲量（生鮮）は41.4千トンであり、常磐～三陸海域では29.5千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では7.2千トン、道東太平洋海域では4.3千トン、太平洋のそれ以外の海域で0.4千トンであった（図2）。なお、近年の漁獲量のピークは9月～11月である。

(2) 関連調査結果

A：第1次漁場一斉調査

6月上旬～下旬に実施された第1次漁場一斉調査（釣り）の結果、全水域の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は0.76尾であり、2010年（0.41尾）を上回ったものの、2006年以降の平均水準（0.99尾）を下回った（図3）。

三陸周辺海域（41°N以南、143°E以西）では1.43尾であり、2010年（0.25尾）を上回った。津軽海峡～道南太平洋海域（41°N以北、143°E以西）では0.03尾であり、2010年（0.05尾）を下回った。沖合域（143°E以东）では0.74尾であり、2010年（0.51尾）を上回った。CPUEが10尾を超える海域は沖合域で認められ、この海域に高密度で分布していたと推測される。

日本海で6月下旬～7月上旬に実施された一斉調査において、津軽海峡西口周辺海域（39～42°N、138～140°E）における平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は14.1尾であり、2010年（10.6尾）を上回った。

B：新規加入量調査結果

5月下旬～6月上旬に常磐～三陸周辺海域および沖合域で実施された表中層トロールネットを用いた漁獲試験の結果（図4）、外套背長5cm以上8cm未満のスルメイカの平均漁獲尾数（30分曳網当たり漁獲尾数）は4.0尾であり、2010年（518.7尾）を下回った。予測期間内に漁場への加入が見込まれる外套背長8cm以上の大型個体の平均漁獲尾数は2.5尾であり、2010年（39.3尾）を下回った。

C：魚体の大きさ

6月上旬～下旬に実施された漁場一斉調査（釣り）で漁獲されたスルメイカの全調査点での外套背長組成は、モードが16cmにある単峰型の組成であり、2010年（13cm）より3cm大きかった。海域別にみると、三陸周辺海域でのモードは17cm（2010年：16cmと21cm）、津軽海峡海域では12cm（2010年：11cm）、沖合域では16cm（2010年：13cm）であった（図5）。

6月の若鷹丸によるカレイ類・マダラ0歳魚分布調査において着底トロール網で漁獲されたスルメイカの外套背長のモードは、仙台湾では20cm（2010年：15cm）、八戸沿岸では18cm（2010年：12cm）であった。

(3) 2011年の各海域の漁況経過（5月～6月）

震災による定置網の被害や出漁する漁船数の減少などにより太平洋沿岸での水揚げ量に影響が現れている。各地域での漁況経過と確認されている震災の影響を表1に示した。2011年5月～6月の太平洋沿岸主要港での水揚げ量（生鮮：速報値、一部未集計）は0.4千トンで、前年（2010年5～6月、5.6千トン）を下回った。三陸海域南部～常磐海域での6月の主要港での水揚げ量は0.01千トンで前年（4.6千トン）を下回った。三陸海域北部での6月の主要港での水揚げ量は0.2千トンで前年（0.6千トン）を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域の水揚げ量は0.1千トンで前年並みであった。

(4) 今後の見通しの説明

- ・本予報対象海域である常磐～道東太平洋海域の漁獲対象資源は、漁獲情報および漁場一斉調査の結果から、概ね前年を上回る水準であると推測される。
- ・常磐～三陸海域での漁獲対象資源は太平洋沿岸域を北上する群を主体に、津軽海峡から回遊する日本海由来の群が加わると考えられている。三陸周辺海域における漁場一斉調査でのCPUEは近年5年平均を上回った。漁場一斉調査での結果から判断した結果、太平洋沿岸域を北上する群の資源水準は概ね2010年を上回ると判断される。一方、津軽海峡から回遊する群の来遊水準は、前年並みと推察される（後述）。以上のことから常磐～三陸海域の来遊水準は前年を上回ると予測される。魚体サイズは、漁場一斉調査、カレイ類・マダラ0歳魚分布調査の測定結果から、前年（8月、モード20cm）より大型の個体が主体になると考えられる。
- ・津軽海峡～道南太平洋海域での漁獲対象資源は、津軽海峡から回遊する日本海由来の群と太平洋沿岸を北上する群である。津軽海峡西口周辺海域での調査船によるCPUEは前年を上回り、函館港に水揚げされた小型いか釣り漁業によるCPUEは前年並みであったことから、日本海由来の来遊水準は前年並みか上回ると推察される。津軽海峡東口周辺海域での調査船によるCPUEは前年を下回ったことから、津軽海峡東口～道南太平洋海域への来遊水準は前年を下回ると推察される。また前述のとおり、太平洋を北上する群の資源水準は前年を上回ると推察される。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋海域への来遊水準は前年並みと予測される。魚体サイズは、漁場一斉調査の測定結果から、前年（8月、18cm）並みの個体が主体になると考えられる。
- ・道東太平洋～根室海峡周辺海域に来遊する漁獲対象資源は、沖合域を北上する群と考えられている。漁場一斉調査における沖合域でのCPUEは前年を上回ったことから、道東太平洋海域に来遊するスルメイカの資源水準は2010年を上回ると推測される。また、気象庁の海況予測モデル（MOVE）によると、本年は道東沖合域の北上暖水の張り出しが前年よりも強まると予測されるため、道東沿岸域への北上回遊時期は前年よりも早くなると推察される。以上のことから、7月～9月における来遊水準は前年を上回ると予測される。魚体サイズは、漁場一斉調査の結果から、前年（8月、19cm）より大型の個体が主体になると考えられる。なお根室海峡～オホーツク海への来遊時期は、例年通り10月以降になると予測される。

表1. 漁況経過 (2011年5月～6月、一部未集計・暫定データ含む)

	漁況経過
北海道 道東	道東太平洋主要港での釣りによる水揚げは7月8日時点では、まだ見られていない(2010年は釧路港が8月6日)。
北海道 道南	6月における函館港での釣りによる水揚げ量は86トンで、前年比74%であった。CPUEは前年比118%であった。6月下旬の水揚げは昨年を上回った。
青森	6月の白糠港への釣りによる水揚げ量は、83トン(前年比1093%)であった。CPUEは前年比147%であった。6月の八戸港の釣りによる水揚げ量は4トンで、6月28日に初水揚げがあった(前年よりも4日早い)。6月の大畑港の釣りによる水揚げはなく、7月10日に初水揚げがあった(前年より1日早い)。震災によりイカ釣り船数隻に被害があり、三沢～八戸の定置網3ヶ統で被害がみられ、定置網の漁獲圧は3割ほど減少すると見込まれる。
岩手	震災の影響により漁獲情報未集計。10月末時点で大型定置網は59%、小型定置網は44%が復旧する見込み。イカ釣り許可漁船は全73隻中27隻が被災により操業できない状態にある。
宮城	震災の影響により漁獲情報未集計。6月末時点で今漁期中の出漁隻数は例年の10～20%程度となる見込み。
福島	原発事故の影響により、漁獲はおこなわれていない。
茨城	6月の主要港における水揚げは、沖合底曳網による水揚げ量が7トン(前年比94%)、小型底曳網による水揚げ量が4トン(前年比47%)であった。CPUEはそれぞれ前年比72%、29%に減少した。スルメイカを対象とする底曳船は一部被災したものの、6月末時点でほぼ全てが復旧した。
千葉	5月の主要港における定置網による水揚げ量(3トン)は、2010年(4トン)を下回った。
神奈川	5月～6月の主要2港における定置網による水揚げ量が4トン(前年比327%)、釣りによる水揚げ量が1トン(前年比112%)であった。
静岡	5月～6月の主要港における釣りによる水揚げ量(13トン)は、2010年(11トン)を上回り、CPUEも前年比126%に増加した。
三重	5月～6月の主要港における中型まき網による水揚げ量(11トン)は、2010年(156トン)を下回った。
和歌山	5月～6月の主要2港における釣りによる水揚げ量は18トンで、2010年(0.03トン)を上回った。
高知	5月～6月の主要3港における釣りによる水揚げ量(10トン)は、2010年(3トン)を上回った。CPUEは前年比128%であった。

注：CPUEは1日1隻当たり漁獲量

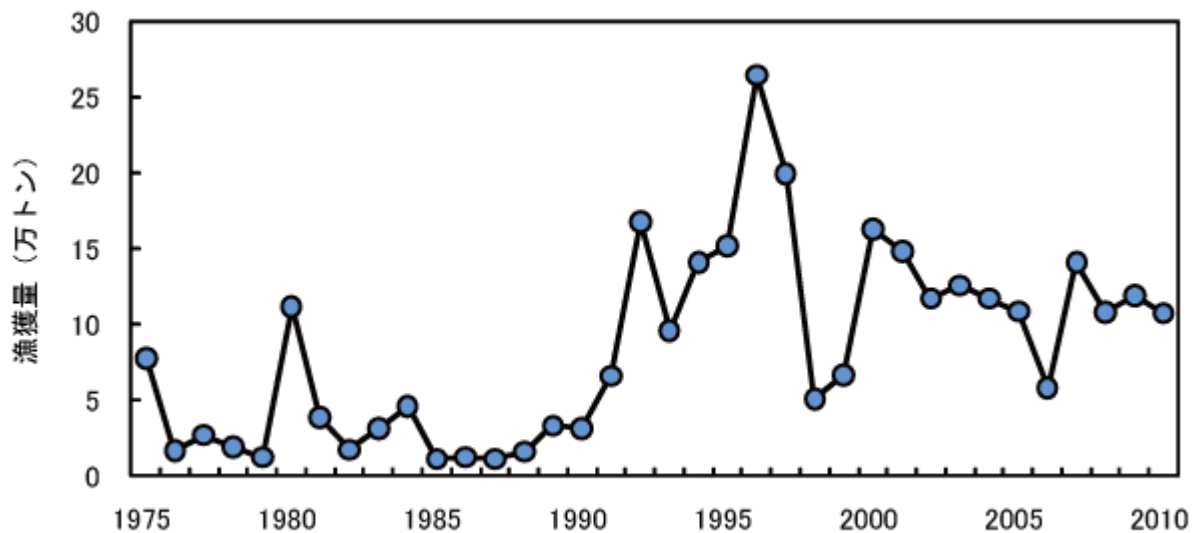


図1. 太平洋におけるスルメイカの年別漁獲量の推移
(集計値は暦年)

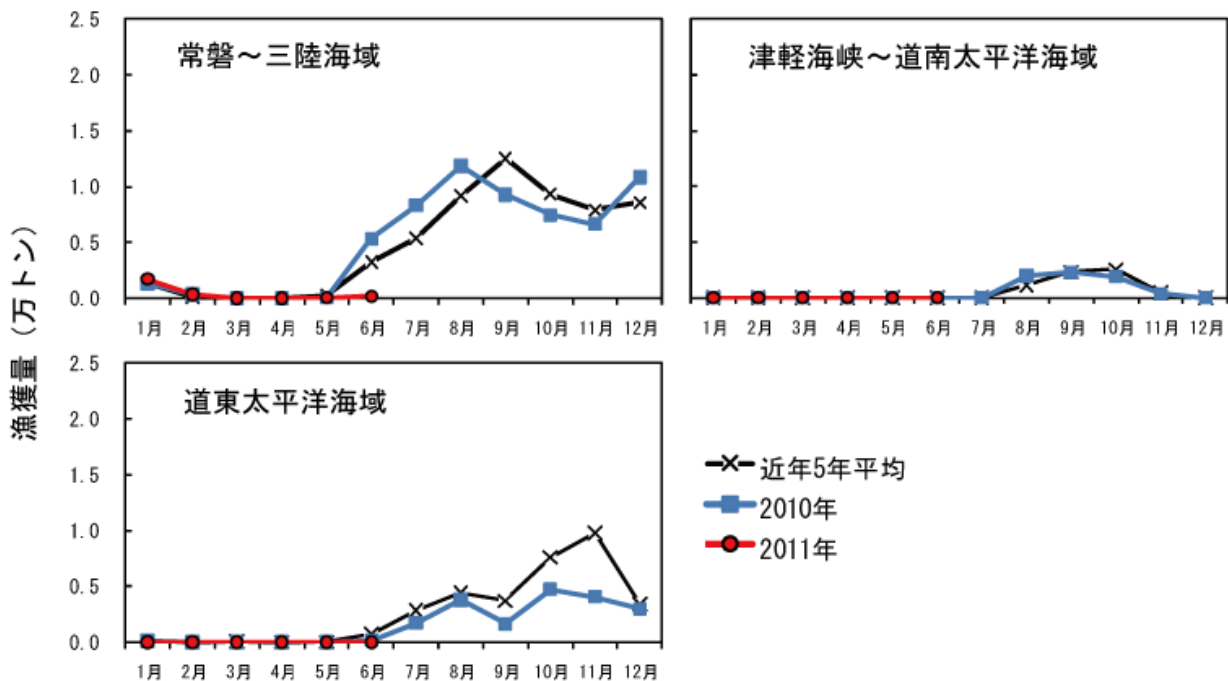


図2. スルメイカ月別海域別漁獲量 (生鮮)
近年5年は2006年～2010年
(釣り・定置網・底曳網・まき網)

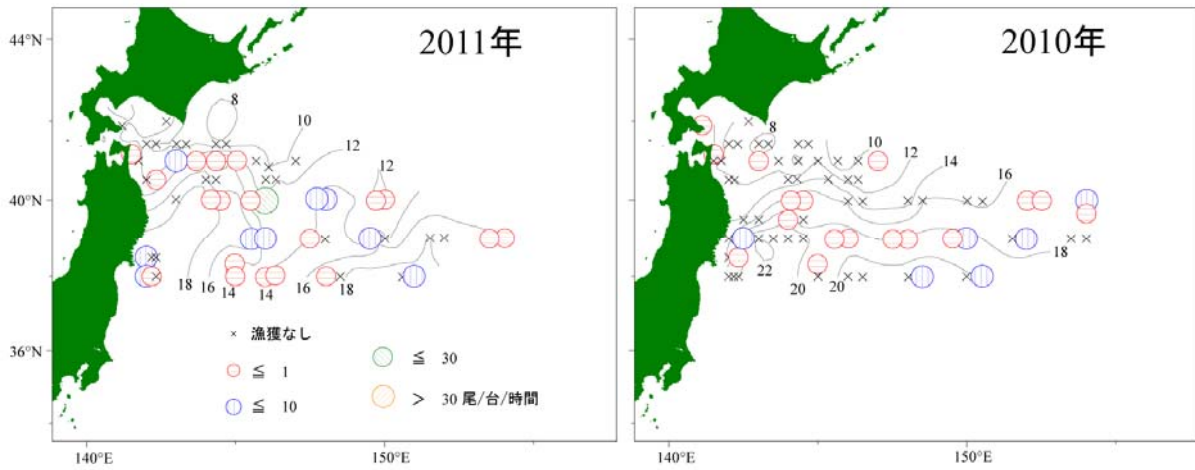


図3. 太平洋いか類漁場一斉調査の結果
 2010、2011年に実施された第1次漁場一斉調査におけるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布。×は漁獲が無かった点、実線は等温線（海面水温）を示す。

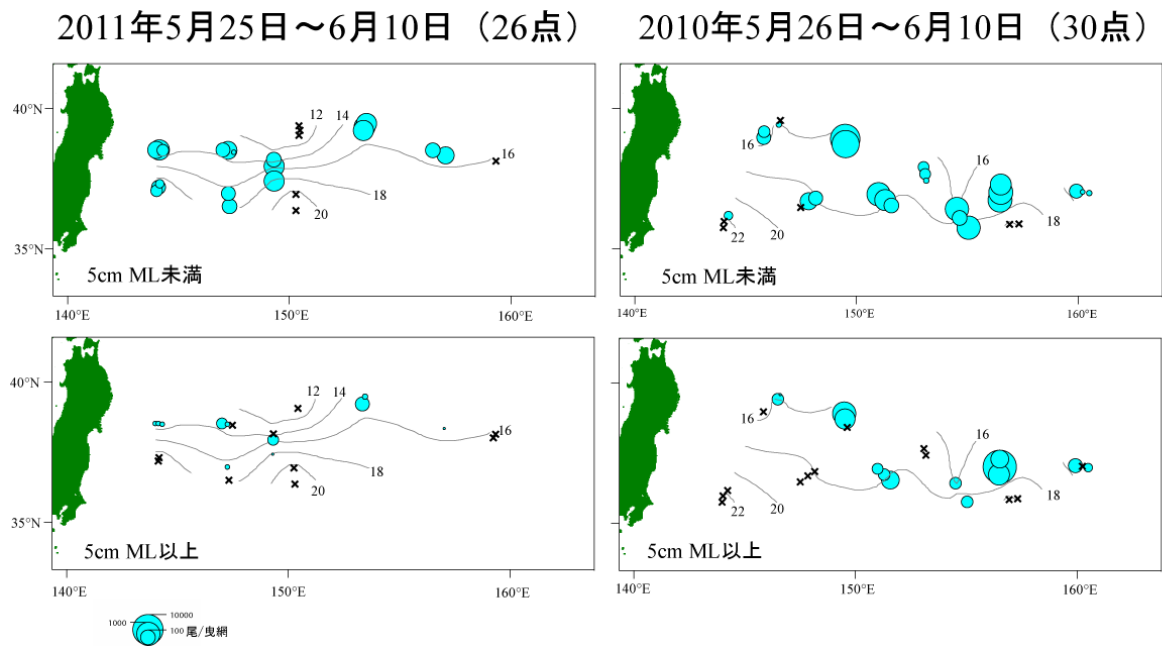


図4. 新規加入量調査の結果
 2010、2011年に実施された新規加入量調査におけるスルメイカのCPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）の分布。×は漁獲が無かった点、実線は等温線（海面水温）を示す。

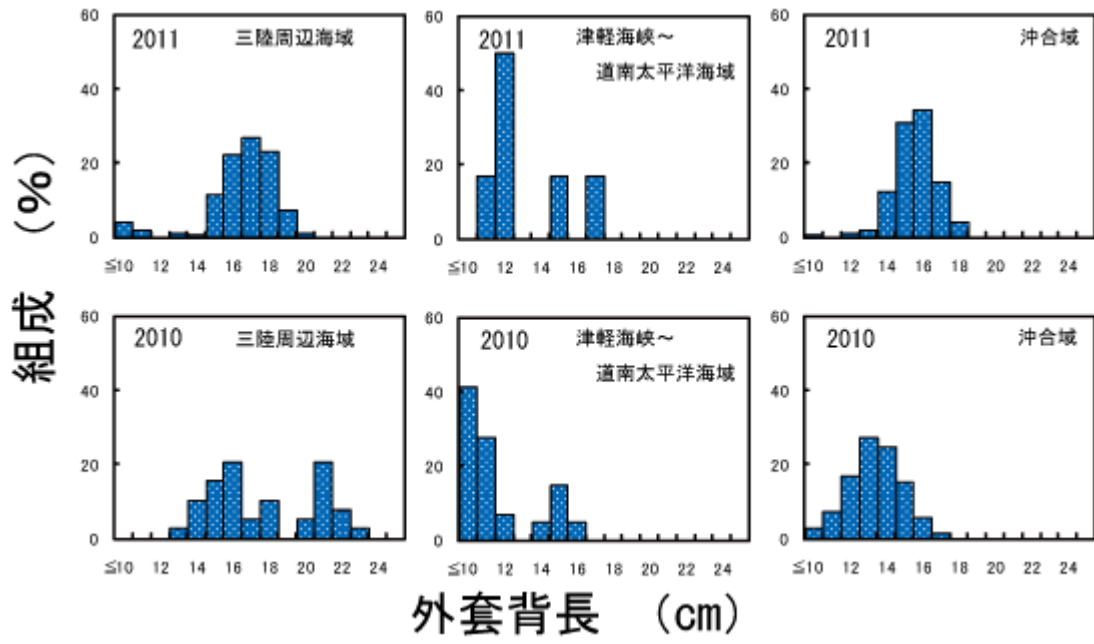


図5. 漁場一斉調査による外套背長組成

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
茨城県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 東北区水産研究所 日本海区水産研究所 中央水産研究所
千葉県水産総合研究センター	(取りまとめ機関)
神奈川県水産技術センター	独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所
静岡県水産技術研究所	